

---

# シュライン-ワルツ 《shrine-waltz》

紫衣 玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シュライン・ワルツ《shrine-waltz》

### 【Nコード】

N8332Y

### 【作者名】

紫衣 玲

### 【あらすじ】

高校1年生の輝栄・悠きえい・ゆうはある日シュラインという能力を持つ少女、暉阜・祠宇てるおか・しゅうと出会う。実は悠は彼女と以前にも会っていたことがあり……

?: 杏鳴 < expose the lie of the world > ?

どうも紫衣・玲というものです。きちんとした体裁で小説を書くのは初めてですがよろしくお願ひします。どこまでうまく書けたかわかりませんが…この作品は、一応ライトノベルです。つまりラノベのお決まりは一応起きます。そういう展開は嫌だ!という方は前書き中に切ってもらっていいです。

「あれ…?」

きえい・ゆう

輝栄・悠：15歳・高校1年生・趣味は知恵の輪などのパズル全般を解くこと、好きなモノは紅茶・マカロンなどお菓子、嫌いな物は初対面で馴れ馴れしくしてくる奴…は困り果てていた。

「どうして家電売り場に…? 食料品売り場じゃないのか…?」

そう迷っていたのだ。彼は先月できた、シヨップング・センターに来ていた。いつもなら家に近くのコンビニで済ませるが、今日はどうしてもシヨップング・センターに行かなければならない理由があった。それは…

「紅茶の茶葉、早く買わないと…」

そう、紅茶のストックが無くなったのだ。今まではネットで頼んでいたが、シヨップング・センターに紅茶専門店があると聞き、入学して1ヶ月立つ学校の帰りに寄ってみたのだ。

「しかし…本当に迷っちゃったな。いつもはこんなことないのに…」  
彼は特段方向音痴ではない、しかし初めての環境では人間は普段なら考えられないことを起こすものである。悠は一时间ぐらいこんな風に歩き回っていた。今はなぜか家電売り場のテレビのコーナーに来ていた。目の前では、大小様々なテレビが様々な番組を写している。ただ歩きまわってもまた迷うだけなので、それを眺めながら次の行動を考えていた。その時、

「き、あああああああああああああああああ」

女性の悲鳴のようなものが鳴り響いた。悠も他の人々も悲鳴がした方向へ向いた。しかし、悠はなにか違和感を感じ、テレビに視線を戻した。そこには

自分が写っていた。

一台だけでなくすべてのテレビが彼の姿を写していた。しかし他の人々はそれに気づかない、気づくはずもない。なぜなら、もともと

悠以外にも誰もいなかったのだから。

「え…なんで…？」

彼の心を違和感は確実に蝕んでいった。なぜ自分が写っているのか、なぜ今さつきまで板人々は消えたのか…

違和感…

違和感…

違和感違和感違和感違和感違和感…

違和感違和感違和感違和感違和感違和感…

違和感違和感違和感違和感違和感違和感違和感違和感…

違和感違和感違和感違和感違和感違和感違和感違和感違和感…

違和感違和感違和感違和感違和感違和感…

違和感は恐怖に変わっていく。異様なものをすぐに受け入れられるほど人間はタフではない。

コワイ…

怖い…

コワイ怖い怖い…

コワイ怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ怖い怖いコワイ怖い怖い…

コワイ怖いコワイ怖い怖い…

彼の目は揺れる、彼の足は震える、彼は止められない。

そして悠は我に返る。今は悲鳴のした方に行かないと…そう思った。そうしたらこの現実離れた馬鹿げたことから逃げられるだろうから…そんな気もしていた。そして彼は悲鳴のした方へ向かう。まだ、悲鳴がしてからはそう時間が立っていない。誰かが致命傷を負っていてもまだ助けられるかも…そうやって今、体験したことを記憶の隅に押しやっていった。

「はあはあ」

しかしいくら走っても、あの強烈な情景は目に焼き付き、消えない。しかし今は悲鳴がした方へ向かう。なぜか足が止まらないのだ。まるで引きこまれているかのように。そして意識は薄れていく。まるで誰かに操られているかのように…

? : 杏 鳴 < expose the lie of the world > ?

どうだったでしょうか？あらずじに出たた祠宇って子は！？ていうかシユラインって何！？そう思っている方、もう少しお待ちください。あとこの作品あの作品のパクリじゃね？ということがあったら、言ってください。

あれは何時の事だっただろうか。彼女と…銀の髪を風になびかせる彼女と出会ったのは…

あの日僕は、父さんと母さんの職場にいた。あの頃はまだ子供で、父さんと母さんが話していることが全然わからなくて（今でもわからないけど）廊下で遊んでいた…と思う。知恵の輪をずっといじったりして。そうしたら、

「一人で遊んでるの？」

と僕と同じ年（それは彼女から聞いた）の…そうだ思い出した、あれは8年前の冬のことだった。その日は学校が休みで、とても寒い日だった。だから彼女はダツフルコートに子供用のロングブーツという重装備だった。彼女に僕は

「うん、知恵の輪外そうとしてるんだ。」

そんな僕に彼女は、何も言わずに笑いかけた。

「それ、外そうとしてるんじゃないかって、引っ張ってるだけだよ。」

そして彼女は、僕の隣に座り

「実は、私も知恵の輪持つてるんだ。一緒に外そうよ。」

「うーんそれだけじゃ面白く無いから勝負しようよ。」

「望むところだー」

僕らは、ほぼ同時に知恵の輪をいじりだす。彼女は慎重に、じつくりと構造を見ながら、僕は無計画に、力任せに。

「出来た!!!」

その日その言葉を叫んだのは、当然彼女だった。

次の週、僕は両親と一緒に再び研究所に行った。僕が一緒だと仕事がかどるのだという。

両親はよくわからないが何かの研究をしていた。僕はまた、廊下で遊んでいた。もちろん知恵の輪をいじりながら。するとやはり彼女も知恵の輪で遊んでいた。

「また、会えたね。」

彼女は年不相応な、とても同じ10歳とは思えないくらいの微笑を浮かべながら言った。

今日は、知恵の輪の外し方を彼女に教えてもらう。

「そっちの輪を右に回して…うん、そうそう」

「次は？」

「次はね…」

簡単な作りにみえて、その知恵の輪はなかなか外れなかった。なんとか外したときには、もう日が暮れ始めていた。

「私そろそろ帰らないと。」

立ち去ろうとする彼女に僕は

「ちよつとまって君の名前は？」

「てらおか・しゅう 祠宇。暉卓・祠宇。君は？」

「輝栄悠。悠つて呼んで。」

「じゃあね悠。」

次の週も僕は研究所へ向かった。今日は、父さんの持っている知恵の輪を持っていった。それは父さんにも解けないらしく、頭を抱えていた。それを彼女に、祠宇に見せると。

「うーん、難しそうだね。」

「二人でなら解けるよ。」

それから僕と祠宇は親が呼んでくるまで、試行錯誤し続けた。

次の週も僕は研究所に行った。しかし彼女は来ていなかった。あの知恵の輪はまだ解けていない。そしてあの時以来、祠宇にはあつていない。



? : 否鳴 < expose the lie of the world > ?

突然の過去編です。ヒロインが登場です。意外と短く更新してきま  
す。でも、次はちょっと長引くかもです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8332y/>

---

シュライン-ワルツ 《shrine-waltz》

2011年11月24日23時52分発行